林白の作品にみられる女性形象

伊禮 智香子

1　作者紹介

林白(本名は林白微)は 1958 年 1 月、広西壮族自治区北流県に生まれた。「下乡」経験を持つ。82 年に武漢大学図書館学系を卒業後、広西図書館、広西映画製作所などの勤めを経て 90 年に北京「中国文化報」に移る。95 年にリストラされたあとは執筆業に専念し、97 年に『林白文集』4 巻(江蘇文芸出版社)を刊行した。創作歴としては詩の方が早く、作品数も多いときくが、文集に一部掲載されているものの発表数自体は少ない。小説は「土平房里的人们」(『広西文学』83 年 9 期)が処女作であるが、本格的に作家活動を始めるのは 80 年代後半以降で 90 年代に入って注目を浴びはじめた。

林白の作品はしばしば漢族文化とは異なる南国の異国情緒があると評される[i]。亜熱帯生まれの彼女の作品には、豊かな水を湛えた河、南国の植物、雨、湿気を帯びた空気、光と影のコントラストなどが描き込まれ、物語の多重構造や語りの二重性と呼応し、掴み所のない独特な作品世界を形作っている。語りは現在の視点で過去を回想するパターンが多く、語り手の「私」は林白の分身的存在で、彼女自身の過去の記憶が材料になっている。林白は「记忆与个人化写作」[ii]の中で「個人の記憶もまたある種個人の想像である」と言っているが、単なる事実の記憶ではなく、その瞬間の感覚の残照が彼女の創作に大きな影響を与えているように思う。例として幼い頃の記憶を挙げると、林白は三歳の頃に父親を亡くし、保健婦である母親はしばしば「下乡」させられた。その度に彼女は幼稚園に預けられるが、小学生になると保健所の宿舎で一人暮らしをさせられる。七歳から十歳の記憶には、人気のない宿舎の暗い廊下、放置された男女の生殖器の模型、霊安室、度々見た母親が死ぬ悪夢、机に縛り付けられて殺される山羊――溢れる血、口から吐き出される泡、流れる尿――などが強く印象に残っているという。林白はその頃の記憶が、自分の全作品に底流していると言っているが[iii]、そうした孤独、死、恐怖といった幼い頃の記憶は、生命力に溢れた亜熱帯の自然の中に影として織り込まれ、影が揺れるような不安を作品に漂わせている。

林白の作品を女性形象に着目してみるとき、特徴の一つとして、発狂し、失踪し、自殺していく女たちの存在に気付く。女たちは自らの身体に耽り、自己愛が強く、男性とは健全な関係を構築できずに破綻していく。その病的な女性形象の意味するところは何かについて幾つか作品を採り上げながら考えていきたい。

2　鏡に向かう女たち

まず林白の小説に出てくる自己愛の強い女性形象をみておく。女たちは、男性を介在させることなく、自らの身体を愛でる。鏡と向きあう女たちの描写を以下でみてみる。

1)沙街の石という石は、熱気にあぶられている……街は物音一つしなかった。暑さが頂点に達すると物音はしないものだ……カーテンが下ろされている。女は服を脱ぎ、鏡の中の形のよい、柔らかで愛らしい自分の乳房を眺めていた。(「同心爱者不能分手」87 年)

2)女は化粧を終えると、いっとき目的を忘れたかのように鏡の前にゆったりと坐り、部屋中の電気をつけた。昼のように明るい光線の下、化粧を施して一新した自分の顔にうっとりした。(「飄散」93 年)

3)一番好きなのは鏡、秘められた場所をじっと見つめる。亜熱帯、長い昼下がり、浴室で涼をとり、全身を眺め、撫でる。(「一个人的战争」94 年、語り手「私」)

4)彼女は鏡の位置を調整する。鏡の最も優れているところは女に完璧な美への欲望を生じさせることだ。北诺はできるだけ胸を張り、お腹を引っ込めて、鏡の中の細い腰と豊かな胸とを見た。……一人の時、時折服を全部脱ぎ、鏡の中に自分の身体を何度も映して眺めた。床に落ちた服が映っていた。……片手で身体の上を撫で、揉みしだき……(「致命的飞翔」95 年)

鏡に映した自分の裸体を見る女は、見るだけでは飽き足らず、自らの身体を愛撫する。中には、抜歯した飼犬(ﾒｽ)を裸の胸に抱き上げて、乳首を舐めさせたり、湯浴みの時に、下女にまんべんなく自分の身体を手で打たせ快楽を感じる女もいる。

こうした、男性を介在させずに女が自らの身体に向きあい、性の愉しみを得るという衝撃的な描写は、裏返しに、男性とのセックスに苦痛を感じている女たちを描写することになる。互いの関係性が如実に現れるセックスの場における男女の意識の溝は、両者の関係性全般を暗示している。

3　受容されない男性――女の側の生理的苦痛、拒絶

ここでは、男性とのセックス描写を通して、男性と快楽を共有できずに、生理的苦痛のみを感じている女たちをみてみたい。

1)彼女は目をぎゅっと閉じた。手足は冷たかった。老律の熱い身体が彼女の冷たい身体

にぶつかり、声をもらした。熱い塊が何度も押付けられたが、彼女は鉄のように、固まったまま、動かず、声を上げることなくこの重さと痛さに耐えていた。(「瓶中之水」93年)

2)彼女は男の身体が硬く、ごつごつと押し入ってくるのを感じた。……最も美しい行為であるはずなのに、まるで酷刑を耐えしのんでいるようだった。……もし、自分が巫女だったら、済んだ途端に男を呪って恐ろしい病気に罹らせてやるものをと思った。(「致命的飞翔」)

こうした、1)と2)にみられる男性に対する女の嫌悪や憎悪にも近い感情をどう考えたらよいのだろうか。上記の作品における男性形象を通して考えてみたい。

→　1)「瓶中之水」

女主人公に影響を与える男性は二人いる。一人は引用文に挙げた老律だが、もう一人は継父である。作中ぼんやりとしか示されないが、幼い頃に継父から性的虐待を受けたことは、彼女の男性不信の要因になっていると考えられる。彼女はファッション界で成功することを願い、自分に有利な宣伝文を書いてもらうために老律に近づく。彼は、芸術学院工芸美術科の講師で四十数歳、既婚だが妻とは長期別居生活にある。結局、二人は関係し女は身ごもってしまう。打算で結び付いたはずが、いざ、堕胎するとなると女の方は躊躇し、一旦決断したあとも不安を禁じえない。費用はいいから、暫く一緒にいたいと頼む女には気持ちの変化がみられる。しかし老律は「明後日、学生を連れて農村にいかなければならない」からと自分の仕事を優先し、女の仕事の便宜を計ることで負債を返そうとする。彼はこの事で離婚することもなく、彼の人生はいささかも変わらない。

→　2)「致命的飞翔」

作中の女(北诺)は自分の便宜を計ってもらうために、男に近づき、二人は暗黙の了解のもとセックスをする。上で引用したように彼女は苦痛を感じているが、男は気付かず自らの力を誇示しようとする。結局二人の間の性の溝は最後に悲劇を生むことになる。最初の関係からしばらくして、出張先から回春剤を入手して戻って来た男は、食事を口実に女を呼び出し、女が来ると、無理やり服を裂き、ベッドへ押し倒す。

……痛さのあまり大声で叫んだ。それは折檻に遭った女の悲惨な叫び声のようだった。……男はその叫び声に今まで味わった事のない快感を味わった。

北诺が拒絶するのを聞かず、男は自分の欲望を際限なく押し付ける。男は女の悲鳴を聞

いても、自分の男らしさの証明を得たとばかりに喜ぶだけだ。そして北诺がぐったりと寝入ったところで、その口にむりやり射精する。最後は、疲労困憊した北诺が、茫然と台所からナイフを持ち出し、寝ている男を刺し殺す。

林白の小説の中には、社会的地位や、経済力のある男が出て来る。彼らは、社会的、経済的成功を優先し、自己本意のセックスからわかるように、女との関係性は重要ではなく希薄である。この「致命的飞翔」にはもう一つの話が同時進行していて、「私」＝李莨には五十を出たばかりの社会的地位のある登陆という不倫相手がいる。その登陆の語る女性観からも、男性中心の考え方が見て取れる。彼の尊敬する女性は、胡風夫人(夫である胡風のために犠牲を払い、連座させられて獄中体験もした)やマルクス夫人、キュリー夫人などである。つまり××夫人と呼ばれ、夫を支えるか、夫と手を携えて仕事をした賢夫人としてしか評価されない女性たちである。「私」は登陆の話を聞いて「女が男のために犠牲になるのなんか好きじゃないわ」と言い、則天武后は素晴らしいと男を挑発する。そして最初の恋人にもマルクス夫人を見習えと言われ、十何年も経った今もまた言われる。時代が変わったって進歩がないものだと男を嘲笑する。ある日「私」が口実を作って登陆の妻に会いに行くと、妻の兰若はまさに登陆の理想とする女性だった。「私」は帰り道、「誰が、私とこんな優秀な女性の兰若とを敵にさせたの？」と心が沈む思いになる。美しく、才能豊かで、かつ家庭のことも疎かにしない自分の理想にかなう妻がいても登陆は不倫をしている。

林白の小説を読むと、自己愛の強い女たちに眼がいくが、その対極としてエゴイストの男が登場し、その男性形象の裏には女を周辺化する強固な男性中心価値観が感じられる。

4　女たちの行方――発狂、自殺、失踪から再生へ

男たちは、社会――外に向かった男の価値体系――の中で生きており、女たちはそこに入ってはいけない。前章で挙げた自分の社会的成功（男性的な価値観と考えられる）のため男に近づいた二人の女も結局はそれに馴染むことができなかった。「瓶中之水」の堕胎を余儀なくされる女は、男の口利きで新しい職場や社会的成功を一旦は手に入れるが、やがて生きがいを見出せず、才能が枯渇してしまったのではないかと脅えている。もう一人の北诺は結局、男を利用しつくすことはできず、ナイフで刺してしまう。その後の北诺の消息は不明で、失踪、自殺、発狂、アメリカへ出国したなどの風説のみがあげられている。林白の小説では、彼女たちのように男性的価値観の中にわが身を投入しようとする女は稀である。多くの女たちは、過剰な自己意識を持ちながら、それを正当化する術はなく、男性社会にあって同化もできず、精一杯その侵蝕から身を守っているのである。それが自己の身体に向き合う女性形象になって現れるのであり、自分の身体に耽溺する女たちの形象

を単に大胆な性表現、過剰な欲望の表明[iv]とばかりは括れないと思う。表現の場としての女性の身体を考える時、男性の欲望の対象ではなく、欲望の主体として、自意識の根拠として身体が問題にされることの重要性を認識する必要がある。林白の作品の女性形象は、男性本位でなく自分が欲望の主体であることを、男性を排除するという極端な或いは病的な形をとりながら訴えているように思える。

こうした自己の女性性にこだわり、男性性を拒否する女たちは結局どうなるのか。

これまで挙げた作品の中の女たちの行方について発表順に並べると以下になる。

1)「同心爱者不能分手」の飼犬に自分の乳房を愛撫させた女→発狂し、自宅に放火して焼死。

2)「瓶中之水」の中絶した→女成功後、仕事に対する情熱を失う。

3)「飄散」の化粧を施した自分の顔に魅入る女→発狂し、自殺。

4)「一个人的战争」の「私」→恋人との破局→故郷から逃走→北京へ

5)「致命的飞翔」の北诺→男を刺し、失踪。

他に「回廊之椅」(93 年)では女は失踪して行方知れず、「子弹穿过苹果」(93 年)に出て来る女は、河に身投げをする、など、発狂、自殺、失踪と破滅していく女性形象が多いが、やがて自殺せずに生きる新たな女性形象が 94 年、95 年になると出て来る。この女性形象の変化から、林白の作品の女性形象を検討したい。

1)「一个人的战争」(94 年)

妊娠した女は、男からもっともらしい理由をつけられ中絶手術を受けるが、その前後に男はこっそり別の女に求愛をしていた。その打撃から女は故郷を離れ、北京へやって来るが抜け殻のように北京の街をさまよい続けている。しかしある日偶然、昔の知りあいに出くわす。それは、夏の暑い盛り、ほとんど何も身に付けず、鏡に向きあっている梅琚という女だった。家によばれ中に入ると、相変わらずどの部屋も鏡に囲まれている。女は鏡張りの部屋の中で、何とも言えない安らぎを感じるのであった。「一个人的战争」の末尾には以下の言葉がある。

> 一人の戦争ということは、自らの片手で自らを打ち、壁が自らを遮り、花が自らを破滅させるということを意味する。一人の戦争ということは、一人の女が自身を自らに嫁がせるということを意味する。
>
> その女は、鏡に映った自分を見つめた。自己愛に充ちていながら、同時に微かな自虐の念も混じっていた。自分自身を自らに嫁がせた女は誰もが、折りあうことの

ない両面性を多分に抱えている。まさに二つの頭を持つ怪獣のように。

その後、女は手でゆっくりと身体をまさぐりながら、自分の性器に辿りつく。中指が子宮の入り口に触れた時、感電したように女は驚きの声をあげる。文中「彼女は自分で自分を呑み込んだ」とある。それは男性のペニスが必要とされないことの暗示とよめる。鏡の前でマスターベーションをするその女は自滅を孕むことを承知した上で、男性的価値体系に依らない自らの世界に立ち返り、それを糧に生きていくのである。

2)「守望空心岁月」(95 年)

女は夫と普段は別居生活を送っている。女は夫とセックスする前に、自分の身体を自分で愛撫し、たかめてからでなければ欲情せず、セックス以外の二人の結び付きは希薄である。ある日女は夫の不倫現場を目撃してしまったことにより、精神に異常をきたす。その原因は夫への愛情によるものではないのは明らかで、女は自尊心が傷つけられたことで、精神的に破綻したと考えられる。しかし、狂ったのは一時的で女は自殺までには至らない。精神病院を退院して来ると、女が人前に現れることはごく少なくなる。つまり強力な自己の内に引きこもることで、女の再生がはかられるのである。

時間軸で眺めた場合、発狂したり、自殺したり、失踪する女性形象から、生きていく女性形象への移り変わりは、女性性の重視や女の自己愛を仲立ちにして発展的な動きをみせているように思う[v]。故になぜ、女たちが発狂し、自殺し、失踪していくのかを解釈するに当たっては、男性的な価値観への敗北と捉えることはせずもっと積極的に評価したいと考える。つまり、女たちが、自分の欲望や感性に忠実に、男性的価値観体系の侵蝕から自己を守るための抵抗であったということである。そして、特筆すべきは自殺しないで生きていく女性形象の立脚点になっているものが、女性性の重視、女の自己愛というべきものだということである。「一个人的战争」の「私」は再び鏡の前に立ち、自分の身体を愛撫することを契機に立ち直り、「守望空心岁月」の女は退院後、自己の中に引きこもることで再生をはかる。語弊をおそれずに言えば、筆者は病的な、不健康な意味あいで否定的に語られることが多い[vi]「自己愛」というべきものへの回帰を積極的に捉えたい。自己愛は、言い換えれば自己存在の肯定であり、女が女性性に自閉的に引きこもることは、男性性——商業主義社会、競争社会における男性優位、またそこで成功するという男性的価値観——への拒否、無意識の対抗になっていると考えられる。加えて、女たちの自己愛が自分の身体に向かい、男性を介せず、充足している姿は、健全な状態とは言えないながらも、女を性的に満足させていると思い込んでいる男性に対する警告でもある。勿論女性が、自分の女と

しての性を強調することはフェミニズム文学研究においても問題になる(女性性の強調——エクリチュール・フェミニンは、生物的本質主義に陥りかねないこと、逆に男性性や女性性といった概念の固定化や二項対立の図式を助長しかねないことなどの問題を孕むということはよく指摘される[vii])ことであり、それに輪をかけて、女の自己愛を肯定的に評価することの危険性は承知している。しかし、開放後はもとより新時期以降も依然として、女性形象の中性化の傾向がみられる中で[viii]、女性の身体性を表現した林白の作品は画期的である。また、自己愛についても、林白の作品の女性形象の特徴を論じる上で欠かせないものであり、アプローチの方法として示唆に富むものだと考える。

今後、その自己愛の強い女たちの形象がどう展開されるか興味深いところであり、さらに作品分析を通して引き続き考察していきたい。

---

[i] 陳晓明「欲望如水：性别的神话——林白小说论略」(『鍾山』93年4期)

[ii] 『花城』96年5期、『作家』97年7期　『林白文集』4

[iii] 「空中的碎片」(『林白文集』4)。そのほか自伝「流水林白」(『作家』94年5期、『林白文集』4)

[iv] 「90年代的个人化写作」座談会での陳駿濤の発言(『作家』98年5期)

[v] 陳思和「林白论」(『作家』98年5期)は、97年の「说吧，房间」について、「個人的立場から出発して、社会的現象に対して、異議を唱え、反応している」とし、作品が社会に開いていることを発展の兆しとして歓迎している。

[vi] 中山文「施蟄存〈霧〉の読み方——素貞の自己像をめぐって」(『求索』2号,88年)などは自己愛を否定的に語っているように思う。この論文では、男性を通して自己実現する女性は、実は自分自身だけを愛しているに過ぎず、それは女性の自我のもろさであるとしている。そして現代女性にも普遍的にみられるのではないかと述べている。この論文から10年たった現在、筆者としては男性を否定して、自己に閉じこもる林白の女性形象の中に女の自我の強さを感じ、強さとは言えなくても、男性を通して自己実現を計ろうとしない女たちは新たな方向にあるのではないかと思っている。

[vii] だが中国でも、孟悦、戴錦華『浮出历史地表』(河南人民出版社89年)「序」〈『中国の女性学』(勁草書房98年)に田端佐和子氏の訳あり〉というエクリチュール・フェミニンの手法を用いて文学史に切り込んだ仕事もある。

[viii] 金燕玉「林白与女性化写作——兼论90年代女性文学的新景观」(97年北京で開催された中国当代文学研究会との対話会上の発言原稿)や江上幸子「〈第二高潮〉期の女性文学と勃興するフェミニズム文学批評」(『世界文学』77号,93年)参照。